

場面構成

- 第一段 はじめ〜誰もなかった。【虎になる前の李徴】
第二段 翌年、監察〜次のように語った。【袁愴の出会い】
第三段 今から一年〜頼んでおきたいことがある。【虎になった李徴の心境】
第四段 袁愴はじめ〜（漢詩）。【詩の伝録】
第五段 時に、残月〜ためばかりではない。【虎になった理由】
第六段 ようやく〜おわり。【袁愴との別れ】

第一段

1. 若くして役人になる
博学才穎（非常に頭がよい）
狷介（協調性がない）
自ら恃むところが厚い（自信過剰）
 - ← ・出来の悪い上司の命令に従いたくない。
 - ← ・詩家として後代に名を残したい。
2. 退官する。
生活が苦しくなる
文名は簡単に上がらない
 - ← ・妻子の衣食のため
 - ← ・己の詩業に半ば絶望した＝半ば未練を残していた
3. 復官する。
才能のない連中の命令を受ける
快快として楽しまない（不平不満）
狂悖の性が抑え難くなる（非常識でわがまま）
4. 発狂し行方不明になる

第二段

1. 李徴と袁愴
 - ・袁愴＝温和な性格
 - ・李徴＝峻峭な性情衝突しなかった
2. 李徴が袁愴に姿を見せなかった理由
旧友の前にあさましい姿をさらしたくないから。
袁愴に恐怖と嫌悪を起こさせたくないから。

自尊心

第三段

1. 虎になるまでの過程

- ① 戸外でだれかが我が名を呼んでいる。

運命、自尊心

- ② 声を追って走っている内に虎に変身していた。
③ 目を信じなかった。
④ 夢にちがいないと思う。
⑤ どんなことでも起こりうると思つて懼れた。
⑥ 理由を考えたがわからない。

「理由もわからずに押しつけられたものをおとなしく受け取つて、理由もわからずに生きていくのが生き物のさだめである。」

あきらめ

- ⑦ 死のつとを思った。
⑧ 兎を見たときに自分の中の人間は姿を消した。

理性

×しあわせ。

虎としての残虐な行為に悩まなくてすむ

自分の存在を懷疑しなくてすむ

詩人の未練が断ち切れる

恐ろしい。

運命に引きずられる不安

人間、詩人への未練

- ⑨ この気持ちは誰にもわからない。

第四段

1. 李徴の依頼①

詩の伝録

財産を失い、自分が生涯執着したものを後代に伝えたい。

2. 袁慆の感想

格調高雅、意趣卓逸。

第一流の作品になるには、どこか微妙な点において欠けている。

3. 李徴の自嘲①

虎となつても、詩に未練があるから。

「詩人になりそこなつて、虎になつた哀れな男」

第五段

尊大な	羞恥心
臆病な	自尊心

詩によって名をなそう ← 進んで師についたり、詩友と交わって切磋琢磨に努めたり
 (自尊心) することをしなかった (臆病 才能のなさが暴露するので
 はないかという危惧)

俗物の間に伍することも潔しとしなかった (尊大)

己の珠にあらざることを惧れる (羞恥心) あえて刻苦して磨くこともせず (臆病)

己の珠なるべきを半ば信ずる (自尊心) 碌々として瓦に伍することもできなかった
 (尊大)

臆病な自尊心、尊大な羞恥心 = 猛獣 (虎)

飼い太らせた = 怠惰 中途半端

外形も虎になった

第六段

1. 李徴の依頼②

おれは死んだと告げてほしい。

妻子が飢え死にしない様に援助してやってほしい。

生きているかもしれないという期待を起こさせないため。 = 妻子

夫が虎になってしまったという驚きを起こさせないため。 = 妻子

虎になったことを知られると、自尊心が傷つくから。 = 自分

2. 李徴の自嘲②

妻子の生活よりも、自分の詩の方を先に依頼するような、人間性の欠如に気がついて
 自らを恥ずかしく思っている。

3. 李徴の依頼③

丘の上から自分の虎になった姿を見てほしい。

哀惨に再び自分に会おうという気を起こさせないため。

自尊心や羞恥心を捨て、ありのままの自分を見てもらおうと思った。

4. 李徴が咆哮した気持

哀惨に会えた喜び。

人間への未練を捨て切った。